

浄

monthly
JODO

土



1999

12

December

法然上人鑽仰会

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



0088-82 (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

徳願寺

千葉・行徳

寺院紀行

寺に歴史あり。

人々に信仰あり。

日本の、心の故郷を紀行する。



徳願寺第三十二世中野亭順住職と方
ほる夫人。下は徳願寺本堂



千葉・行徳
徳願寺



本尊の阿弥陀如来は徳川家康が、一代將軍秀忠の正室、達子(崇源院殿)のために遷座した立像



左が本堂、右は客殿。境内に庭も多く、手入れが行き届いている



宮本武蔵の書状と達磨の絵。
境内には武蔵の供養塔もある



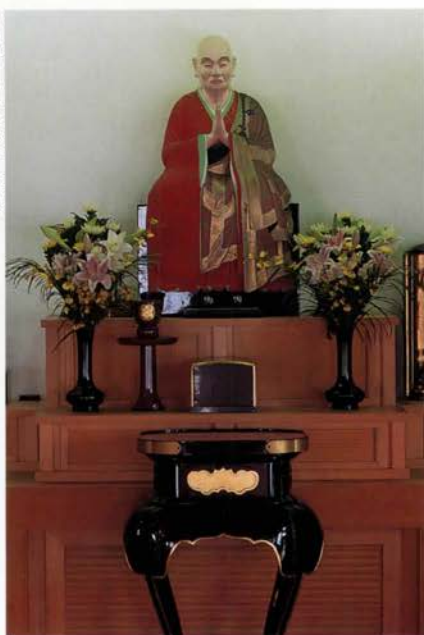
武蔵と並ぶ徳願寺の寺宝の円山応挙の絵。
有名な幽霊画以外に富士もある





穏やかな口調で由緒を語る中野住職

徳願寺開山不残上人木像



長い塀の内に並ぶ天にも届きそうな古松



野鳥保護を目的とした市川野鳥センター

浄土

1999/12月号 目次

モンゴルの少年院等を訪ねて	古宇田亮順	8
寺院紀行 千葉・行徳「徳願寺」	真山 剛	16
コラム仏教歳時記		25
連載小説 法然上人をめぐる人々（八）	石丸晶子	26
御法語に聞く	袖山榮輝	34
列伝 第2回小西存祐先生	坪井俊映	38
第2回つば庭日記	近藤啞々砂	42
Jフォーラム		47
浄土誌上旬会	選者=増田河郎子	50
編集後記		54



表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下
表紙撮影=三浦功大
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

モンゴルの 少年院等を 訪ねて

民間交流は
パネル・シアターと共に

古宇田亮順



半年前頃、NHK TVよりモンゴル社会の変動が激しく、街にストリートチルドレン（孤児）が増え、北国独特の寒さを防ぐため、マンホール住いをする少年達の様子が放映された。放牧を業とする遊牧民の多いモンゴルで何故？と一寸疑問をもった。TVでは、ソ連崩壊後、社会主義から離れ、急激な資本主義経済導入による都市化の流れの中で失業率も高く、親から見放されてしまう子供達が多く、困惑するモンゴルの現状が伝えられていた。この一年余りでも首相が三回も交代する程苦闘しているこの国で、人々の生活形態も大幅に変らざるを得なくなってしまったという。

蒙古斑、ジンギスカン、旭鷲山、ゴビ砂漠、馬と大草原等々興味つきないそのモンゴルの赤十字社から、中学英語教師の友人を通じて是非来蒙して、恵まれない立場の子供達にパネルシアターを見せて欲しいとの依頼があった。

夏期休暇中のため、特に養護施設、障害児学校の児童、それから少年院（刑務所）の少年達などに日本の楽しい歌や物語りなどパネルで演じて貰えば、関係の教師達とも良い教育交流ができるからと強く要望され、鉛筆や文房具などを持参して若い教育関係者十名程で八月下旬出発した。

関西空港を飛び立って、北京を過ぎ、広いゴビ砂漠を越えて四時間余りで、首都ウランバートルに到着した。「街道をゆく」で知られた司馬遼太郎が、二十五年前に初めてモンゴ



ルを旅した時は、シベリヤ經由で三日位かけてやつとの思いで到着したというのに、今は朝日本を發つて午後二時過ぎには着いてしまうという便利さである。本年は小渕首相も来られたということで、急激に親しみ深ささえ感ずる程の国になっていた。日本の四倍もある広大な国ながら、人口は僅か二百五十万人で、馬なら九百万頭、他に牛、羊、やぎ、らくだ、トナカイ等数知れず生息する地で、夏でも朝晩は冷えこむ日も多く、湿気も少ない土地なので、暑い夏の日本からの旅行者にとっては恵まれたところである。

戦争記念塔（ザイサントルゴイ）の裏手の小高い丘に、高い塀に囲まれた少年院（少年刑務所）はあった。軍人管理による一寸ものものしい入口を通つて、広々とした庭を過ぎた二階の集会室に案内された。

日本からのボランティアグループとはいえ、平素は小学校や養護施設の教職関係者ばかりなので、年令の高い十四才ゝ十八才までの異国の少年相手となると一寸不安もあった。少しでも緊張をやわらげようと、前日、施設児童を前に行なつたプログラムを基に研究練習を重ねて、雰囲気明るくして臨んだ。幸いな事に、前日の公演で共感してくれた国立人形劇場の支配人氏も応援にかけつけて、モンゴル語の童謡や歌遊びの時には積極的に合唱指導してくれた。およその内容は左記の通りで行つた。

赤十字本社にて



障害児学校で

少年代表者会議



一、モンゴル童謡と遊び（マームーナシ）

二、モンゴル風絵画作品「花」（喜名昌吉作）

三、日本の童謡（しゃぼん玉とばせ、コブタ）

四、観客参加クイズと遊び（野菜の名前、欲しいものナニ、造形クイズ）

五、物語り（スーホーの白い馬）

六、日本の童謡（小さな世界、おもちゃのチャチャチャ、カレライス、アイアイ）

七、日蒙語混合歌遊び（幸せなら手を叩こう）

以上で約一時間の実演であったが、これに日本から持参したアコーディオンの伴奏やキーボードの演奏を加え、難解な解説には、仲間や赤十字社の人の英語、モンゴル語の協力があった。幸いな事にパネルシアターの場合は基本的には絵（貼り絵）と音楽が中心なので、珍しさと判りやすさが受けて、最後まで皆真剣に集中してくれた。特に今回のためにモンゴル人にも親しまれているという沖縄の「花」の歌をモンゴル風に新しく作り上げ、観客参加のクイズや遊びは、若い仲間が早速マスターしたモンゴル語に手話も入れて進行了。やはり今回新しく作っていった「スーホーの白い馬」は自国の民話なのでという希望から、モンゴル人が原語で語り、日本人が操作し、モンゴル人による演奏も加わるという豪華な親善公演が実現し、アイアイ等易しい歌は室中に大合唱が響いた。その興奮のま

まに続けられた、最後の「幸せなら」の手遊びは現地の人はモンゴル語で、自分達は日本語ながら動作は全く同じという共通性で会場は湧いた。

以上で終わりですと告げると、所長さんからすかさず、「特にコブタの歌が楽しく歌えたので是非覚えてたいから」とせがまれ、何度も何度も大声で歌い続けた。最後には、少年達から御礼の歌という事で「故郷を憶う」という静かな歌を聞かせてくれたが、中には涙ながらに歌う少年も多く、自分達も心に深く感ずるものがあつた。そして一日も早く、彼らが幸せになって欲しいと願わずにはいられなかつた。

そしてこの少年が描いた白馬の絵ですがと、丁寧に描かれた画用紙をおみやげに頂いた。絵を差し出しながら所長さんは「軍人である私としては今まで日本人には、こだわりをもち続けていた。しかし今日のこの感激でわだかまりがすっかり消えました。日本から来て貰って本当に有難う」と強く手を握ってくれた。半世紀以上も前とはいえ、ノモンハン等の戦いの記憶は消えず、日本について複雑な感情をもっていたので、今日のこの出会いですっかり払拭されたと告白され、民間交流の必要性を痛感した。

なお「白い馬」はモンゴルでは「優しい心」を意味するそうだが、その馬の頭の形をもつモンゴル楽器、馬頭琴で演奏するモンゴル民謡も日本民謡と良く似たところが多く、のどかな優しさが感じられた。



ゲル(家)

他にも国立人形劇場での施設児童招待会(二回)、赤十字本社、少年代表者交流会議、障害児療育学校(第二十九校)等での講義、公演は、自分達にとっても良い勉強になった。

また赤十字担当課長とは個人的にも親しくなり、その御宅にも招待され、暗い階段を上った三階のアパートにお邪魔させて貰った。親戚の子供も混えて、パネルシアターの他に日本舞踊も披露した家庭的な交流会も忘れ難いものとなった。

モンゴルの仏教といえばチベット仏教の影響により大きな力をもっていたが、六十年前のソ連支配による政治弾圧から、一度は殆ど崩壊状態にあったが、近年少しずつ寺院の復興も始まり、特に中心のガンダン寺の二十六メートルに及ぶ巨大な観音様も四年前に復興され、モンゴル仏教徒の信仰のよりどころが取り戻され、日曜日には参詣者で賑わっていた。

都会から離れた草原で暮らす牧畜の人達は、ゲルというテントによる移住生活を基本とするので「物は多く持たない方が幸せて、財産をもちすぎる人は不幸だ」という少欲生活を送っているだけに、やたら物欲の多い自分の生き方を考えさせられた。

(西光寺住職・パネルシアター創案者)



草原

今月の表紙

嬌容三変

蓮

LOTUS

12月

池の中に蓮華あり
大如車輪
青色には青光あり
黄色には黄光
赤色赤光
そして白色には白光ありて
微妙香潔なり
舍利弗よ
極楽国土には
かくの如くの
功德莊嚴が成就される

蓮華

この不可思議

たとえ七寶池ハ功德水なくとも

小さな泥田に

咲く

美しく咲いて

いる

浄土と蓮

仏教伝来以来日本人の心には、蓮の花は極楽への来迎花になりました。特に、浄土教と蓮の係りは大変深く、浄土三部経の一つ、無量寿経に「衆生は蓮花の中に、自然に化生して、跏趺して座す」と、阿弥陀経には極楽浄土の様子を「七宝で光り輝く蓮池に、五色の大輪の花蓮が青黄赤白の光を放っている」とあり、人々は来世極楽浄土に導かれることを願いました。平安貴族は浄土教の思想を具体化した浄土庭園を創り池に蓮を植ました。現在お寺の多くに花蓮が見られないのは淋しいです。浄土宗のお寺の皆様、境内で花蓮をたくさん育てて下さい。

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の語」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文華史」(カド創房)などがある。

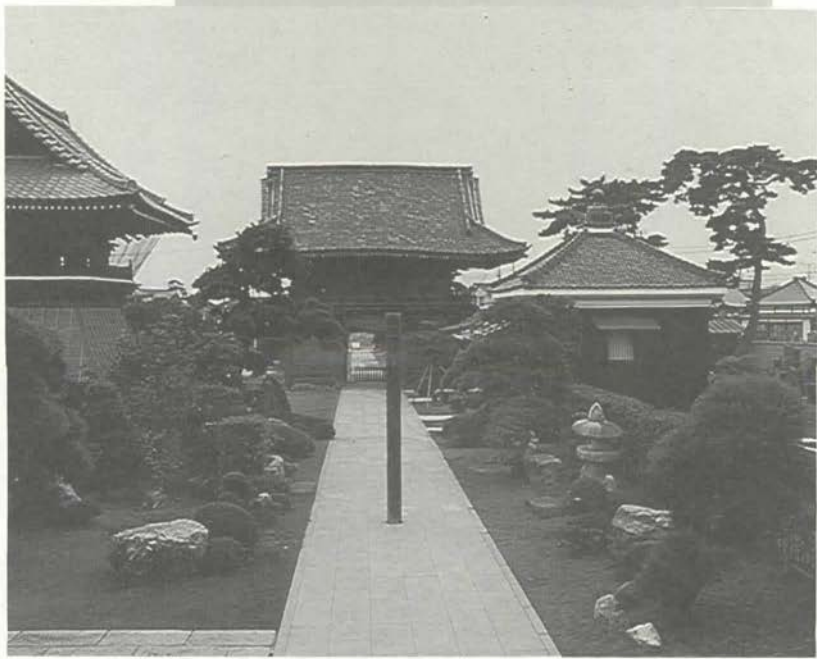
寺院紀行

千葉・行徳

徳願寺

写真／夕力才力邦彦

文／真山 剛



本堂から見る山門と鐘楼（左）

もうすぐ西暦二千年。この連載も五年目を迎えることになる。よく続いている。これもひとえに編集部のお蔭である、感謝。

さて、今回の取材はこの連載を毎号楽しみに読んでいただいている寺院で、通された応接間にはすでに風呂敷一抱えの資料が用意されていた。取材の前後には資料収集のために地元の図書館に通う私にとっては宝の山である。

『行徳物語』市川新聞社

『市川／市民読本』市川市教育委員会

『市川市 浦安市／地図に刻まれた歴史と景観』新人物往来社

『千葉県史跡と伝説』暁印書館

『千葉県妖怪奇異史談』同

そして各種雑誌と新聞切り抜き、寺院紹介パンフレットなどなど。目の前に並べられたこうした資料を見て、今回もまた良いお寺に來させていただけ、と編集部に心の中で御礼を言いつつ、同時に住職の心配りに頭が下がり、どういった方なのか大いに興味が湧いていた。

長身を折り曲げるように頭を下げながら、「ようこそ、いらっしやいました」と入って來られたのは、徳願寺第三十二世中野亨順住職である。

聞きたい事はすぐ聞いてしまう。インタビューとしては最低だ



通勤客でにぎわう朝の地下鉄東西線、行徳駅

が、聞きたいことは我慢できない性分は抑えられない。これこそ欲望の赴くままで、坊さんには不向きな性格だが、お坊さんになるわけではなく、お坊さんが読むものを書くのだから許されるだろう。

さてさて、住職は会津の出身であった。昭和二十一年に福島県耶麻郡山都町という山林の小さな浄土宗のお寺に生まれた。小中高と地元の学校に通い、バレーボールでは県大会やインターハイで活躍したという。大学から東京に出てきて、東京のお寺にお世話になった。その縁で浅草のお寺、といってもこれも決して大きくない寺に入り、そして昭和五十五年からこちらのお寺も預かることになったという。

一見飄々としたその風貌で、苦勞のかけらも見せないが、色々な苦勞をしてこられたのはその優しい心遣いにあらわれている。この夏に会津のお寺を取材して知ったのだが、会津のお寺は浄土宗の中でも経済的に大変な地域なのである。

その住職がこの徳願寺でまさに八面六臂の活躍をしている。昭和五十五年に住職となつてから八年後の昭和六十三年、まず名鐘といわれた鐘を復興する。同じ年に会館新築。平成三年には書院と庫裡が同時に完成し、さらに本堂の改修も終えている。翌年の晋山・落慶式のあと、平成九年には袴腰のついた鐘楼を改修し、その間に庭園も整備している。さらに二千年に入って早々には、山門の改修を

かつての交通路だった江戸川。多くの物資がこの川で運ばれて来た



しょうか、というのである。

手の行き届いている境内と整備されている数々の伽藍。一体どうしてこれだけの大事業を次々とこなせるのだろうか。一般的にこうした経済的な話しは質問しても聞けないことが多い。住職は寺の象徴であり、あまりこうした世俗的なことは避けることが多いからだ。しかし、中野住職は何のわだかまりもなく、淡々と話してくれた。

要はバブル期にマンション用地として売却した五百坪の収入をバブル崩壊後に使っているからだという。実にわかりやすい。境内を売ることに反対していた一部の関係者も、住職が境内伽藍を整備する度に納得してきたという。

幸か不幸か、自分も含めてお金には縁のない知人ばかりなので、こうした話が夢物語のように聞こえてしまう。住職も運の良さを認めてはいるが、無欲だからこそ今日の今日なのだろう。

資料から大分話しが逸れてしまった。資料に戻ろう。

そう、これだけ資料があるということは徳願寺が古刹、名刹であるという証なのだが、その資料に共通するものがいくつもあるが、その中で代表格は、やはり宮本武蔵である。

徳願寺の表玄関には両手を伸ばした位、宮本武蔵の本が並べてある。また参道脇には武蔵の供養塔があり、武蔵の描いた八方にらみの達磨の絵や書も残っている。



今年の十夜法要で初めて公開された
円山応挙の涅槃図

というのも実はこの徳願寺は武蔵ゆかりの寺として有名で、多くの研究者や武蔵ファンがやってくるのである。中には供養塔の近くで剣をふるう猛者、というよりは武蔵と同じ求道者であろうか、そうした輩もいるという。

また、少し離れた妙典みょうでんには、武蔵の供養の本尊として身代り観音がある。藤原観音堂に安置される市の指定文化財で、腰をひねった木像仏は、三十三年に一度開帳される秘仏である。

そしてもう一つやはりこれも資料に共通する話題の代表格だが、円山応挙まるやまおうきよの幽霊絵である。応挙は狩野派の絵を学び、それに中国の写生技術と西洋の遠近法を研究して円山派という派を確立した江戸時代中期の画家だ。そしてこの応挙こそ幽霊から足を消した人物と言われているのである。

先の武蔵の達磨絵と一緒に応挙の幽霊絵も見せてもらった。巻頭のカラー写真を見ていただくのが一番早いですが、本当に恐ろしい行相である。この幽霊絵一年に一回お十夜に一般公開される。本堂の裏堂に掛け、光はろうそく一本というから、その恐ろしさたるや絵とわかっていても筆舌に尽くし難いだろう。また今年の十夜では応挙の涅槃図も初公開された。

この他に徳願寺の名物は、永代橋水難横死者供養塔、北条政子ゆかりの本尊阿弥陀如来、運慶作といわれる閻魔大王像、先に述べた



きれいに整っている内陣



裏堂には位牌が整然と祀ってある。
上段は徳川家の位牌

鐘樓堂と話題には事欠かない。

そして何より目を引くのが境内左手から奥の屏にそって並ぶ十数本の老松である。天まで届こうかという松はずらり立ち並ぶ寺院の中から徳願寺をひととき目立たせている。不思議なもので何かそこだけタイムスリップした感さえ漂わせている。

徳願寺はもとは普光庵と呼ばれた草庵で、関東十八檀林に数えられる埼玉県鴻巣の勝願寺の末寺であった。それが慶長十五（一六一〇）年に徳川家康の帰依により新しく堂宇が建立されることとなった。徳願寺の徳は徳川家の徳の字と、本寺である勝願寺の願の字をとって命名されたのである。開山上人は聡蓮社円普不残上人である。

本尊阿弥陀如来は北条政子が霊夢をみて仏師運慶に彫らせた立像で政子の念持仏といわれる。はじめ鎌倉にあったものを家康が二代将軍秀忠の正室で、念仏信者として有名だった崇源院殿（浅井長政の三女）のために江戸城に遷座させたもので、崇源院殿逝去後にこの徳願寺に安置されたものである。

こうした関係もあり家康、秀忠、そして崇源院殿の実子である家光と、徳川時代の基盤を築いた三代の将軍から特別な計らいをもらっている。

さて、なぜ徳願寺が徳川家の手厚い比護を受けたのか、それは行徳の歴史を繙くと自ずと見えてくる。



本堂内陣の脇に祀られている閻魔さま

いくつかある地名伝説だが、その中で有力なのは修験道の行徳上人にちなむ説だ。その行徳は現在の江戸川の河口のデルタ地帯であり、この地形を活かした塩田で全国に名を馳せていたのである。

塩といえば赤穂をはじめ瀬戸内海の塩が有名だが、行徳の塩は質でいえば少々瀬戸内より落ちたものの、北条氏が関東を制定していたころから生産されていて、それが天領となり徳川家直轄の産業となつて大いに栄えた。

敵に塩をおくる、という言葉があるように当時の塩は貴重で、家康は塩は国の宝と大事にした。江戸から目と鼻の先である行徳はこうした塩の生産地として大正の大津波がくるまで盛んであった。

そして行徳はこの塩のおかげで水運の要所として大いに開けた。また、成田詣での通り道でもあり、多くの参拝者がここ行徳の地を通つたのである。古い地図を見ると多くの寺が立ち並ぶ行徳街道が右に折れると成田街道となる。

その成田街道に面して徳願寺がある。北条氏の時代から多くの寺院がこの行徳に建立されているが、徳願寺は中でも多くの参拝客を集め、永代橋水難横死者供養塔は成田講の心ある人々によって建立されたものである。

このように水運で開けた町、同じ千葉の流山や埼玉の川越などもそうだが、そうした川沿いの町は鉄道の敷設に反対することからそ



地域の葬祭に利用されている会館

の隆盛の幕を閉じる事が多い。行徳も総武本線の乗り入れに反対、総武本線は市川を通ることとなり、以来昔の面影を史跡として残すだけの町となってしまった。

とはいえ営団地下鉄東西線の敷設で現在は東京への便利な通勤地として多くの人々が住んでいる。そして来年には妙典に新しく駅ができる事となる。徳願寺からすぐの所だ。

吉川英治の『宮本武蔵』で武蔵が伊織と二人で自然と戦いながら武者修行をした妙典。その地名は今も残っているが、その妙典に駅ができるのである。変われば変わるものである。

さて、住職の話で締め括ろう。

インタビューでの最後の不躰な質問、これからの住職としての心構えは、の答えである。住職は物静かにこう言った。

「私は会津出身の上に浅草の寺の住職だったのが、縁あってこの住職になっただけ。そうしたことを忘れないこと。もちろんだからといって何もしいないわけではありません。幸い伽藍も整備でき、墓地も拡張できる準備ができました。できることから少しづつ、無理なくやっていくつもりです」

敵を知り己を知れば百戦危うからず。武蔵ゆかりの寺の住職に、この言葉がぴったりである。

(ルポライター)

徳願寺の歴代上人墓



いつもお世話になっている縫い針にお休みをとってもらい、折れた針を供養し、そして裁縫の上達を祈願する行事、これを針供養といいます。

十二月八日と二月八日のどちらかか、あるいはその両方に行うところもあります。

それぞれの女のさため針供養

田辺ひで女

東京浅草の観音様境内にも淡島社がありますが、元来、和歌

山県加太町の淡島神社の祭神少彦名命を医薬航海の神として、さらに婦人病に靈験があると、いうことで起こった女性の信仰が針供養と結びついたといわれています。

さて、暮れてくると年用意。

今年は例の二〇〇〇年問題も絡んだ少し深刻な様相です。

二人前の豆煮て了る年用意

玉置石松子

こんな風だとかえってさっぱ

十二月

り、すっかりしていいかもしれ
ません。

俳句では仰々しい年用意は少
なく、これだけすればいいとい
う感じのものが多くようです。

厨の灯ひとつ吊り足し年用意

岡本 眸

落ち着いたものです。しかし
今年ばかりはどうなるか。

むつかしきことは云ふまじ年用
意 高田つや女

古き伝統技
三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替00180245231

『書きおろし連載小説』

石丸晶子

法然上人を めぐる人々 式子内親王の生涯 (第二部)

第一回 残された人々

一

寿永三年（一一八四）二月十三日の昼すぎ、阿波介と弥太の二人が、吉水の草庵にかけこんでくるや、ぬれ縁の前で、

「ほ、ほ、法然さま」

「ほ、法然さま」

と口々に奥にむかつて叫んだ。

阿波介は、その無知無学のおろかさを時に人々に笑われながらも、一途に法然に帰依し、法然に仕えてその台所を手伝っている一向専修の念仏者。

弥太は、その阿波介が心をゆるした親友で、やはり法然に帰依し、野菜などを草庵の台所に売りにくる男である。

二人とも、しわが深くきざまれて日焼けした顔を蒼白にし、阿波介などは膝をふるわせながら立っている。

「おお、いかがいたした。二人とも何をふるえておられる」

奥のうす暗がりのなかからぬれ縁に姿をあらわした法然の姿をみると、阿波介と弥太は二人とも、へなへな、とその場に膝をついてしまった。

「いかがいたした」

法然はもう一度訊ねた。そのうしろ影には、法然にしたがつて奥の間から出てきた法蓮房信空が、ひっそりと控えている。

「く、く、首が。く、首が」

阿波介の口がふるえた。

「ご、ご一門の、へ、平家の、平家の」

尻もちをついた弥太は、あらぬかたを指さして声をふるわせ、それ以上、ことばがつかない。

「……」

無言のまま、法然は樹々のすきまをとおしてみ渡せる草庵の彼方に視線をむけた。

阿波介と弥太を驚愕させている平家の首というのは、一ノ谷の合戦で破れた平家の人々の首に違いなかった。

都からさほど離れていない播磨の国一ノ谷

で、源平総力をあげての最初の決戦がおこなわれたのは、数日前の二月七日。

平家敗北の報は、翌八日の朝には法然のもとにもたらされ、討死した平家の人々の首が、ちかぢか京に送られるという報らせも、十日の早朝には、吉水の庵室にまで届いていた。

京都とその周辺が争乱の渦中におかれていたこの日ごろ、今日と明日のわが命を何とか無事につなぐことだけに追われる人々が、吉水を訪れることは以前にくらべて少なくなつたとはいえ、それでも草庵を訪れて教えを乞う公家や女房たち、町びとや武士、僧侶たちはおり、彼らによつて法然にもたらされる情報はやかった。

実は阿波介と弥太がかげこんできた前日の夜にも、公家の一人平基親（たいらのもとむねか）の来訪をうけた法然は、彼から、後白河法皇と一ノ谷で戦勝して都に凱旋した義経たちとの、やりとりの次

第をきかされていたのである。

基親の妹は、法皇に仕える女房であつた。彼女は一ノ谷で生け捕られた平重衡（たいらのしげひら）の妻の一人でもあり、基親は妹と重衡の明日を案じて、法然のもとを訪ねたのである。

彼は法然に、義経たちは討死した一門の首を獄門にかけるだけでは満足せず、その首を槍（やり）に突き刺して都大路をひきまわす許しを、法皇に強要している。と語っていた。

二

「平家の方々の首がどうしたのか」
やがて法然は、視線を彼方にむけたまま、訊ねた。

「ご、ご、ご一門と、ご、ご、ご一門に連なる武士数十の首を」

あえぐようにして阿波介がいった。

「や、槍に突き刺して、都大路を、源氏の武士たちが、ね、ねり歩いております」

蒼白の顔いろのまま、阿波介のあとを弥太

がつづけた。

いくらか落着きを取り戻した二人の話によると、一門の人々の首をみよう、うわさを聞いて見物にきた人々で、首が渡されるといふ大路という大路は黒山の人だかり。

厳寒の折ならいざしらず、桜のつぼみが大きくふくらみはじめたこの日ごろであれば、首の痛みも早く、異臭と、凱旋に酔う源氏の武士や群衆のざわめきのなかでの首の行進はさながら地獄絵巻をみている恐ろしさであったという。

二人は、異臭のなかの人だかりに、何ごとかと近づいていって、その異様な行進にであつたのであつた。

「何ということ」

思わず、手の念珠を握りしめた法然はそう低くつぶやくと、

「で、討死にされたご一門には、どんな方々がおられたか」

と訊ねた。法然には、一つ気がかりなことが

あつたのだつた。

「法然さま」

と弥太はぬれ縁の法然を見あげながら、

「何しろ、わしらはご一門の方々のお顔何ぞ見知りませぬ。されど見物衆や源氏のお侍たちかのしり合っているのをきいておりますと、薩摩^{さつまのかみ}守とか、但馬守とかいうお名が耳に入りました」

「おお、それに淡路守とかいうこともいうておらなんだかの」

阿波介が弥太をふり返りながらいった。

「そんだ、思い出したわい。新中納言の御嫡子とか、無官大夫とか」

弥太はそういうと、さらにつづけて、

「そうじゃ、たしか備中の守とかいうお名もいうておりました。まだ若い公達^{きんたち}とかで、ほれ、見物人がいつときどよめいたではねえか」

と阿波介にいった。

「そうであつたのう。わしも思い出したわい。」

いづれも若々しい御首でのう。法然さま、わしは哀れで泣きましたぞい」

阿波介は、今にも泣きだしそうに顔をゆがめた。

今、弥太がいった薩摩守というのは、清盛の末弟平忠度たいらのただのり四十一歳。

そして但馬守というのは、清盛の弟平経盛たいらのつねもりの嫡子経正つねまさ、あの青葉の笛のエピソードで名高い敦盛あつもり十六歳の兄である。

平家物語によると、平家の敗北を予想した忠度は、都落ちにさいして歌の師藤原俊成しゅんせいを訪ねたという。彼は自分の討死の後、今、俊成のもとで撰進がおこなわれている勅撰和歌集に、一首でも入集すればうれしいと、自詠の和歌をしるした一巻の巻物を、俊成に託した。

後白河法皇によって、千載集と名づけられたのがこのときの勅撰集である。完成したのは文治四年（一一八八）。すでに平家一門の姿は世になかった。

時代は源氏を恐れねばならぬ世に移っていた。

そこで俊成が、「詠み人しらず」、として千載集のなかに加えたのが、忠度の次の一首である。

さざなみや 志賀の都は 荒れにしを

昔ながらの 山さくらかな

一方、敦盛の兄経正は、琵琶の名手であった。彼が都落ちにさいして、仁和寺の先代御室覚性法親王から下賜された琵琶の名器「青山せいざん」を、戦場のちりになしてしまふことはできない、と現御室の守覚法親王に返しにいったエピソードが、哀れ深く平家物語につたえられている。

三

討死した平家の人々の前とそのいたましいさいごは、いずれも法然の心を鋭くえぐらず

にはおかなかった。

だが、その公達の一人として、弥太が「備中守」の名をあげたとき、法然の心にはまた特別の疼きが走ったのである。

この日から丁度十日前の、二月三日のことだ。

一月二十日、大津の粟津の松原で木曾義仲を討死させた源氏の大軍が、二月になるとともに、次は平家と戦うべく、一ノ谷方面に向かつていくと、都はしばし真空状態におちいった。

そんな二月三日、市女笠いちめがさを目深まぶかにかぶり、中年の侍を伴にしたひとりの若い女性が、法然の草庵を訪ねてきたのである。

心に悩みごとがあり、お上人さまのみ教えに浴して救われたいといい、人払いを願って法然と対座したその女性は、しばらくのあいだただ泣くばかり。だが、

「どうなされた。お泣きになるだけではお心の悩みがわかりませぬ。この合戦でどなたか

お身内を亡くされたか」

法然のいたわりにあふれる優しいまなざしとことばに、やっと自分をとり戻して、涙をぬぐった女性は、

「私は岩清水八幡の宮司紀祐清きのすけきよの娘美子よしこと申します。十四歳の春から、小松殿に女房として仕えてまいりました」と名のつた。

ここに小松殿とは、清盛の嫡子平重盛しげもりの邸のことで、重盛の死後は、都落ちの日まで、維盛ゆきもり、行盛ゆきもり、師盛しきもりら、重盛の子息たちが広大な屋敷内に住んでいた。

紀美子きのよしこと名のつたその女性はつづけて、「お仕えいたしますうちに、亡くなりました内大臣重盛さまの末子師盛さまと愛しあうようになり、昨年冬、争乱のただなかで、一子の母となっております」

「おお、それは大へんな御苦労がありましたろう。昨年冬といえば、御一門の方々が都落ちされたあとのこと。お話を伺うだに、御苦

労のほどが思われます」

「……」

法然の優しいことばとまなざしに、美子の目からはふたたび涙があふれた。

「——で、その赤児はお元氣か」

やがて法然は優しく訊ねた。

「はい」

と応えた美子の涙にぬれた目に、かすかな光がよぎって、

「乳もよく吸い、元氣な赤児で、智丸と名付けました。けれども師盛さまは、智丸の誕生すらごぞんじありません」

美子のいうところによると、源平の合戦が東国や北陸各地でくり広がっていた昨年春、つわりがはじまった美子の身を案じた師盛は、一門の人々とともに北陸の合戦におもむく前、近いうちの再会をかく約束して、彼女を、岩清水八幡の父のもとに帰したのだという。

「それが幸いであつたと父は申します。もし、智丸が師盛さまのお子であることを人の知る

ところとなれば、この先、どんなことが起こるかもしれない。智丸の父が師盛さまであることは、わたくしの父と母、そして乳母のほか、誰も知りません」

「おお、それは父上のいわれるとおり、赤児にとつて何より幸せなことであつたかもしれないませぬ」

保元の乱以来、この日にいたるまでの三十年におよぶ内乱の世を、しかとみつめてきた法然はいった。

この合戦に平家が勝利したならば、美子と名のるその女性もその赤児も、末永く師盛とともに暮らせるであろう。

だが、今の勢いをみると、源氏の勢いは強く、予断をゆるさない。

そしてもし平家が破れることになれば、平家嫡流の血をひくその赤児はただではすまされまい——。

法然がそんなことを考えていると、美子は、「お上人さまのもとに伺います前、小松殿に

立ち寄りましたところ、御一門の方々はそのお邸に火を放って都落ちしたと聞いておりましたとおり、小松殿のあとは焼野の原」と声をふるわせ、

「木曾殿を討った源氏は西に向かい、世間のうわさでは今日、明日にも源平の合戦がなされるとのこと。師盛さまのことを思えばいつときも心落着かず、今朝、日の出前に父の家を出、お上人さまのもとに参上させていたのだのでございます」といって泣き伏した。

(つづく)

石丸晶子（いしまるあきこ）

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究科修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝―面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』（人文書院）『お手紙から見る法然さま』（浄土宗出版室）『現代語訳蜻蛉日記』（朝日新聞社）など多数。

御法語に聴く

名号をきくというとも、信ぜずば聞かざるが如し。たとえ信ずと云うとも、唱えずば信ぜざるが如し。只つねに念仏すべしと。

【常に仰せられる御詞】

阿弥陀さまのお名号を聞くとしても、念仏往生を信じなければ聞かないのと同じことです。たとえ信じるといっても、お念仏を称えなければ信じていないも同然です。ただいつもお念仏を称えなさい。

いざという時の備えは？

トルコ、台湾と大地震が相次いだ一九九九年ですが、ついこの間も私の住む長野市で震度四の地震がありました。この地域は断層が多く今回の地震も比較的浅いところが震源で、しかも我が家からさほど遠くないところでの発生とか。震度の割には強い揺れてした。ちょうど三時のお茶にしようとお湯を沸かしていた最中で、妻がすぐに火を止め揺れがおさまるのを待ちました。もういいだろうと、妻が再びお湯を沸かそうとするのですが、はて、どうしたのか。ガスがまったくつかないのです。

じつは数年前ガスの配管工事があり、そのさいガスメーターにガス漏れの探知機を備え付け、ガス漏れがあれば自動的にガスを止める仕組みにしていたのです。さらに震度五以上の揺れを感知した場合にも自動的にガスを遮断し、その間にガス漏れがないか探知するという代物になっていました。

そういえば工事の際、そうした説明を聞いたような気もするのですが、「それほど大きな地震などそう滅多にあるものではない」と思

っていたのか、それとも「その時はその時」と無責任を決め込んでいたのか、妻が取扱説明書を探し出してくるまでは、どうしてガスが止まったのか、まるで想像がつかなかったのです。

さて取扱書を手に私は再びガスが通るよう、メーターを前に復旧の手順を踏んでみましたが、どうしても元通りにならない。何度試してみても、どこかでガス漏れがあるというサインが出るのです。

屋外のガスメーターの前、辺りは暗くなる、手に負えずガス会社に連絡してもまだ誰も来ない、ガスは通るのか、夕飯は作れるのだろうか、風呂は大丈夫か、それよりももう寒い、ガストーブは使えないし灯油もまだ買ってないし……。

やがて技師が到着しなんとか復旧しましたが、どうやらガスが止まった当初、やみくもにガスレンジをいじくりまわしたために感知器が誤作動を繰り返したのではないか、ということでした。

ふだんからガスメーターの取扱書を読んでいる人などそうはいないでしょうが、最初によく取扱書を読んで注意をすればすんなり復

旧したのかもしれませんが。ガスというライフラインのことだけに、地震でガスが自動的に止まるということだけは、ふだんからよく心得ておくべきと肝に命じる次第でした。

ところで来世の安穩、極樂往生を願うとあれば、ふだんからお念仏を称えるよう心がけなければなりません。念仏往生の教えを聞きながら、来世のことはまたその時に何とか考えるさと考えているなら、せっかくの教えが耳に残らない。あるいは耳に残ったとしても実際に念仏を称えなければ、結局は来世などどうでもいいと思っているのと同じことだから、往生など叶うはずありません。

いつ地震のためにガスが止まっても、そのときちゃんと復旧ができるようにつねに注意を心がけ、またいつこの命を終えようともし決して来世の行方を見失わないようにつねに念仏を称える。いずれにしても、いざという時に対するつねの心がけが肝要なのです。

さあ、もうすぐ例の二〇〇〇年です。いざという時の心がけは大丈夫でしょうか。

（浄土宗総合研究所 研究員 袖山榮輝）

連載

雑誌『浄土』を支えた人々

列伝

仏教ルネッサンス再び。珠玉の一冊『念佛読本』執筆者たちの足跡

佛教大学初代学長
小西存祐先生

大本山 金戒光明寺法王

坪井俊映

先生は佛教大学の初代学長という歴史に残る要職につかれた方でありますが、しかしその時代は佛教大学の存立が問われる苦難のときでした。

先生が昭和二十一年八月に佛教大学の前身佛教専門学校の校長に就任されたときは、敗戦もないときです。社会は戦敗による荒廃によって混乱をきわめ、これに併せて浄土宗教団もまた内紛によって混乱していたときでした。

先生が校長に就任された翌年、すなわち昭和二十二年には学制改革によって、浄土宗の僧侶を専門に教育する機関である佛教専門学校の存続が許されなくなり、新制度による大学に昇格せねばならなくなりました。これには学内の諸般の機構拡充は云うまでもなく、あたらしく諸種の設備をしなければなりません。

◆小西存佑先生

ん。それには相当な経費がいります。

それで、これを宗内の卒業生同窓および諸寺院に呼びかけて、後援を願うことになりました。しかし時代は敗戦によって、経済面において困窮をきわめていたときです。しかし坐していることはできません。先生はこの困難の中であって、自から進んで諸方の同窓寺院へ足を運んで募金に努力をされました。いろいろ言葉にすることのできない御心労があったようです。学校の教職員学生も先生を中心として大学昇格のための募財に努力をしました。

その甲斐あって、昭和二十四年二月ようやく願いが達成されて、新制の佛教大学として認可され、初代学長にられました。

先生は明治十九年一月、愛知県稲沢市片原一色の櫻木忠八氏の四男として誕生され、九

◆雑誌『浄土』を支えた人々

歳のとき大阪天王寺区餌差町 最勝寺小西存
祥師の弟子となって出家されました。長じて
浄土宗大学専門部に学び、つづいて研究科に
席を置いて、天台学を専攻されました。明治
四十一年師僧の遷化によって最勝寺の住職と
なれましたが、さらに深く天台教学を極め
るために内地留学生として、二ケ年間叡山に



学席を移して専心に勉学に励まれました。

先生が仏蘭なる雅号を名乗られているのは、
先生の専攻の天台学が天台大師智顗ちぎの教学で
あり、智顗が住せられた故地が仏蘭であるこ
ろより、この名をとられたもののようです。
学成りて大正七年宗教大学教授となり、同
十年には佛教専門学校教授に転任されて、仏
教学、浄土学を講じて宗侶の養成につとめら
れました。

学制改革によって最後の佛教専門学校校長、
初代佛教大学学長になりましたが、在職五
年の間は大学創設期でもあって、苦難の多い
時代でした。

しかし先生の温厚にして無欲なお人柄と学
問に対する熱意は多くの人を引きつけるもの
がありました。教室における先生の講義は大
変わかりやすく、流暢な弁舌には引かれるも

のがあり、ことに「お酒」が少々入っている
ときの名調子の講義には時間のたつのを忘れ
るほどであったと伝えられています。

先生は大学における講義だけでなく、専修
道場（知恩院山内）その他寺院において開か
れている居士林大姉林等にも出講されて、在
家の方々に仏教・浄土教を平易に説いて理解
につとめられました。

昭和二十五年、病氣のために学長職を辞さ

れ、養生につとめられましたが、昭和三十年
五月十五日、尊い生涯を閉じられました。七
十歳です。

天蓮社在眷性阿仏蘭存祐和尚と諡号しま
す。著書として『宗派氣質』『一枚起請文講話』
『授戒講話』等あり、その他に「鎮西国師につ
いて」等、浄土学に関する多くの論文を著わ
されています。

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻『浄土』昭和十一年十一月號持輯

念佛讀本

執筆一覽

石眞大佐中椎
井野野藤村尾
教正法賢辨辨
道順道順康匡

稲小佐江島笹
垣西藤藤野本
眞存春滋愼戒
我祐夫英祥浄

中松梅矢井
野浦原吹川
善眞慶定
英一隆輝慶
(目次登場順)

念仏者必携の書！【特別頒価二千円—送料込み—】

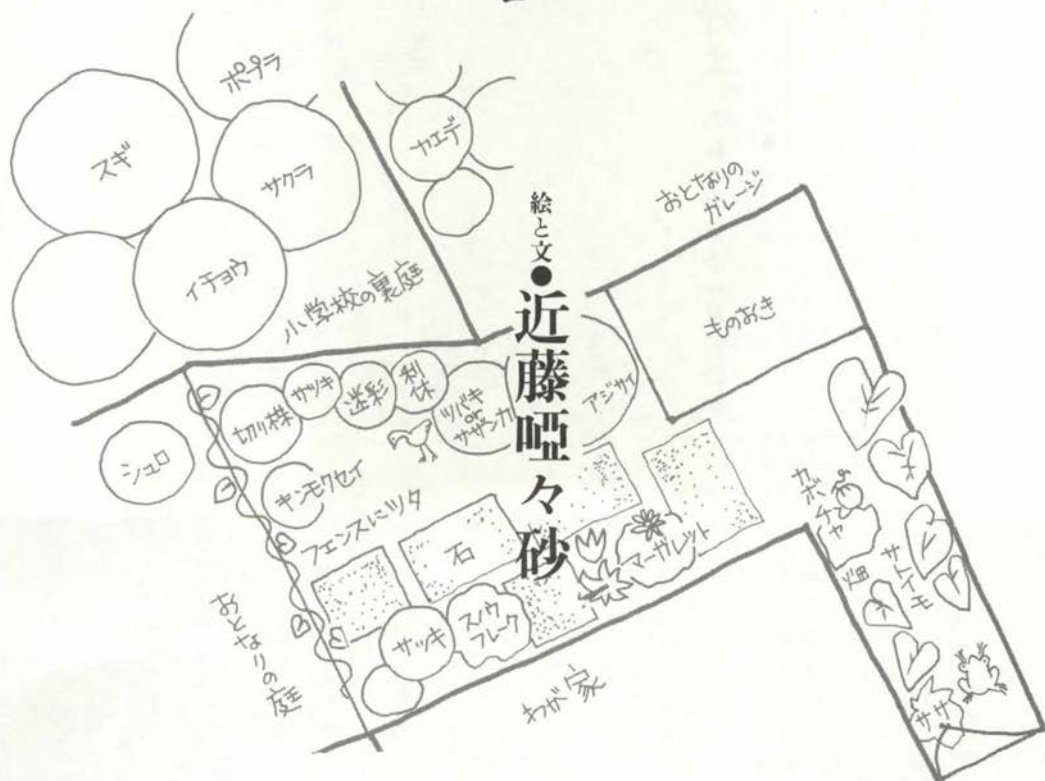
■申し込み・問い合わせ■
法然上人讀仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
電話：03-3578-6947/FAX：03-3578-7036

【農民の誕生】

つぼ庭日記

絵と文・近藤啞々砂



春、庭の隅に出しておいたスチール本棚のバラバラを持ち上げると、その下に大きなガマ蛙が住みついていた。そういえば草ぬきをした覚えがないのに雑草の山がこんもりできていたのは、蛙が寝床作りをしたに違いなかった。粗大ゴミに出すには冬を待つよりない。

ナカガワ老人の畑の一部をレンガで囲い花壇を作った。その中に花種をまき、せっせと水やりをしているとかわいい双葉が出た。花が咲く！ 春に浮かれて息子とふたり踊りながら家中を歩きまわった。その双葉が立派なペンペン草やヘビイチゴになったのは、それから間もなくのことだった。パンジーもスイートピーもサクラソウもどこへ行ってしまったものやら、待てども何も出なかった。

失敗をしたくなければ、何も始めないことだ。あきらめて雑草花壇の取り壊しにかかる。レンガの下は、もやし状になったヘビイチゴの茎が這い、その間に何かの幼虫がまるく眠っていた。レンガはそっと元に戻した。自

分の知らないところでいろいろなことがどんどん進行していて、もう何も止められない。そんなある日、俳句の先輩のヒトシさんからこんな句が届いた。

まなことび腸ながれありほととぎす

飯田蛇笏

……。東京でぼんやり座っていても、木こりが自分の伐った木につぶされて死ぬなどというすごい句は作れない。とりあえず畑に何か植えて、にわか農民になることにした。図書館で野菜作りのありつたけを借りた。どの本も口をそろえて、初心者には手間がかからず、短期間で収穫できる野菜から始めるようすすめている。コマツナなら三月中旬にまいても五月には収穫できる。連作もでき、土作りさえしてあれば放ったらかしでいいらしい。これだ！

その晩、夢を見た。小学生の私が縁側にう

しろ姿で立って何かをじっと見ている。それは月の光にぼんやりと揺れるサトイモの葉っぱだった。そういえば、祖母が裏庭に菜園を作っていたことがあった。

蓮葉のにごりにしまぬ心もて

などかは露を玉とあざむく 僧正遍昭

蓮もサトイモも葉っぱは似たようなものだ。それが露をころがしているのを想像すると、もうコマツナなどただの草っ葉に思えた。入門書を開くと「サトイモは丈も葉も大きく繁るので狭い菜園には不向き」とあり、桜の頃に植えても収穫は十一月。連作障害も出やすく、一度作ったら四、五年は休んだ方がよい、とも書いてある。最悪の条件だ。金子光晴の「どくろ杯」の書き出しを思い出した。『みすみするくな結果にはならないとわかっていても強行しなければならぬなりゆきもあり、またなんの足しにもならないことに憂



身をやつすのが生甲斐である人生にもときには遭遇する。」

サトイモは八百屋で「一番高いの」を六個買いタネイモとした。畑にじかに植えず、苗床に植え、ビニールをかけて暖かい所へ移動させていると気分が高まってくる。半月後、小鬼の角のような芽が出て、そのうち待ちに待った葉っぱが出た。十円玉ほどの大きさだが確かにサトイモの葉の形をしている。

畑は雑草や石ころを取り除き、掘り起こし、石灰をまいて土壌の酸性度を矯正し、サトイモを待つばかり。そして、本葉が三枚ほどになった頃、ようやくと畑に植え込んだ。

次の朝早く畑に出ると、デザートスプーンほどの小さな芽がそれぞれに朝露を溜めて輝いていた。隣の小学校の、葉の出はじめた桜が一斉に花風雪を降らせ、その花びらが畑にも舞い踊り、サトイモを祝福した。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六五一五—〇八八四

京都市右京区西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八

☎〇七五—三一五—三七五三

ポケット版

枕経通夜葬儀諸経偈文集

諸経偈集

こんな経本が
ほしかった

能化必携！

21世紀の経本遂に刊行！

プロが創った

プロフェッショナルのための経本。

緊急、不意の枕経に、お通夜に

能化のお通夜、葬儀のお焼香に

これさえあれば

出先からそのまま回れる。

3つのポイント

◇ポケット版という大きさ！

タテ15センチ、ヨコ8センチ、

厚さ1センチ

◇通夜、葬儀に必要な経文を、

最小限にすべて網羅！

◇経典は、すべて本字にて表記！

内容

廣懺悔

懺悔偈

初夜禮讃偈

佛說無量壽經歎佛頌

佛說無量壽經四誓偈

佛說觀無量壽經真身觀文

回向文

佛說阿彌陀經

一枚起請文

一紙小消息

發願文

脇導師作法

廣懺悔訓誡

定価：2,000円(税込)

送料	1冊	180円
	2冊	210円
	3～5冊	310円
	6～8冊	340円
	9～11冊	380円



◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 〈戒法寺内〉

TEL：03-3441-8971 FAX：03-3441-8702

郵便振替00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

短歌 友へ

蓮門小子

首なしの向日葵のほか華はなし友の遺影の向こうの荒野

一滴の海欲しければ港の名ばかり出てくるわが弔辞かな

目も耳も潰れてしまえ君の死と刺し違えたきわが葬儀式

木魚の口より洩れし真昼さえいつしか果ててなお阿弥陀経

数珠こそは我が血の暗喩てのひらを銃のかたち握らせている

山越えの宙のあなたの名を呼べり命外れてゆくはひとりぞ

此処よりは鬼籍 花野を分け入れば我等ひとつの産声となる

浄土誌上句会

● 柚味噌

〈特選〉

ゆずみその器の柚子の少しづつ

山崎遣迎子

● 柚釜である。柚子味噌を皮に詰めて焼く。茶事にも用いられるが、酒によく合う。底のこげたのに焦点を当てたのがみそである。原句は「柚子の器の」で、これでよいのだが、読者にわかりやすくしてみた。

〈佳作〉病癒えし六腑に渉る柚味噌かな

河合富美枝

柚味噌や日本座敷に影多し

種田 章江

桜島旅の終わりの柚味噌かな

山口 信子

● 破芭蕉

〈特選〉

僧衣めく寺院の隅の破芭蕉

金谷友江

● 芭蕉に冠してある「破」の様子も相当なものだが、比せられる僧衣も、それに負けぬ弊衣を頭に描いているのだろう。その心底には

選者=増田河郎子

厳しい修行に励む僧の理想の姿が、何となく
潜んでいるのかもしれない。

〈佳作〉破芭蕉死者の髭また伸びている

衛藤 潤一

破芭蕉駅に仮設の便所あり

今井 彊

破れ芭蕉小犬じゃれ来る雨の中

谷 しげ子

〈特選〉庭下駄の鼻緒のしめり虫の間

蘭田 郁子

●虫の音に誘われて庭に出してみる。下駄を
つつかけると、鼻緒が少し湿っている。特に
鼻緒を指しているから、衣露ではなからう。
何となく秋の空という、空行きの変わりやす
い頃の様子もよく知られる。

〈佳作〉夜半おき妻の介護や虫の声

上野 明達

砂風呂や顔吹きぬける秋の風

大村 和代

別れ蚊を打ちて襖を汚しけり

浦田 ちあ

柚味噌

柚味噌の土鍋恋しき夜寒かな

中島一子

手作りの柚子味噌持たせり下宿の娘

山本美代子

柚子味噌は先ず仏前へ供養する

上野明達

懐石の一品となり柚子味噌かな

大場清

柚子味噌の遠き記憶とつながりて

太田仁

色づきし柚子もぎ柚子味噌つくらんか

金谷友江

柚味噌して賑わい更に坊泊り

河合富美枝

尼寺の尼ささげ来る柚味噌かな

河合富美枝

柚味噌の由来ながなが電話鳴る

石原新

亡き母の好みし柚味噌の夕餉とる

谷しげ子

柚子味噌を練り上ぐ頃に夫婦帰る

増田信子

訪れて柚子味噌香る夕餉時

大村和代

柚子味噌や子を抱えつつ席に座す

井村善也

締切・十二月二十日

発表・『浄土』二月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

第十二回
浄土誌上句会
のお知らせ

季節

寒鴉

落葉

自由題

手から手へ柚子味噌の香の渡さるる

瀬川浩子

破芭蕉
降りしきる雨の斜めに破芭蕉

河合富美枝

階高き寺領でありし破芭蕉

山崎遣迎子

生くるとは諭すが如く破芭蕉

太田仁

疾風や四方八方破芭蕉

大場清

破芭蕉や晴れて上布となりにけり

中島一子

破芭蕉犬と老人ばかり朝

武田蘭

芭蕉の晝夜の嵐で破れ傘に

大村和代

水軍の語りべ尽きぬ破れ芭蕉

井村善也

楚々として和服通りぬ破れ芭蕉

石原新

破れ芭蕉日ごとに褪せて軒の先

山口信子

自由題

野分去り草叢に降る虫時雨

中島一子

おわさねど好みし芋がゆ手向くなり

山本美代子

夜半おき妻の介護や虫の声

上野明達

絶えだえのちちろ鳴き止みひとり酒

太田仁

天高く水面に雲のゆききかな

金谷友江

朝露に足を濡らして師の御前

山崎遣迎子

初時雨破璃戸に透ける寝釈迦かな

河合富美枝

秋の浜老いが独りて船洗う

浜口佳春

秋風の通る岬の写真展

井村善也

潮騒の聞こえる分校金木犀

谷しげ子

標高のしるし隠して山は霧

中村よみ子

鯉釣のひとりの竿が上がりけり

北川弘子

畑のへり秋雨たまる古き桶

浦田ちあ

☆まちがいは7ヶ所あります。

「冬はやっぱり焼きイモだね」



イラスト
藤井ひろし



まちがいがし

答えは25ページにあります。

編集後記

人去りて寺に残りし秋の声 代潤

今年ももう残りわずかとなり、何か例年とは違う切迫した雰囲気の流れ出した。そして私たちは千九百年代の終わりに、また大きな星を失ってしまった。中村元博士のご逝去である。

四年程前、本誌のインタビューをさせて頂いたことが鮮明によみがえる。

(本誌九十六年一月、二月号に掲載)

学生時代夢中で先生の選集を読み、またある一冊の本から卒論を決めたことなどその学恩は計り知れない。

先生が毎朝日課としてとなえていたという『日課経』が、東方研究会葬のと

きご披露された。三帰依文 般若心経 四弘誓願 生活信条の四つからできている。この「生活信条」を紹介し、供養の気持ちとする。

「生活信条」

み仏の誓いを信じ 尊い御名をととなえつつ 強く明るく生きぬきます

み仏の光をあおぎ 常にわが身をかえりみて 感謝のうちに励みます

み仏の教えにしたがい 正しい道をききわけて 誠のみのりをひろめます

み仏の恵みを喜び 互いにうやまいたすけあい 社会のためにつくします

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川代潤
斎藤晃道

村田洋一
佐山哲郎
間川彰道

編集顧問

大室了晴

浄土

六十五巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成十一年十一月二十五日
発行——平成十一年十二月一日

発行人

編集人

印刷所

真野龍海
宮林昭彦

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六
振替〇〇一八〇八八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



警固なれ



民衆近し、静かに



足元注意



騒音あり



非常口



狭路

住友海上

代理店

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



割れ物注意



安全第一



児童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人顕仰会まで。

【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなきず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠

水晶腕念珠

- 水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
- 水晶数珠 プレスレッド ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額
家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

平成11年6月より頒布価格が変わりました

選択集十六章之図
選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

